

駒I(コマワン) 諸物探訪



藤森 照信
生産技術研究所 教授

駒

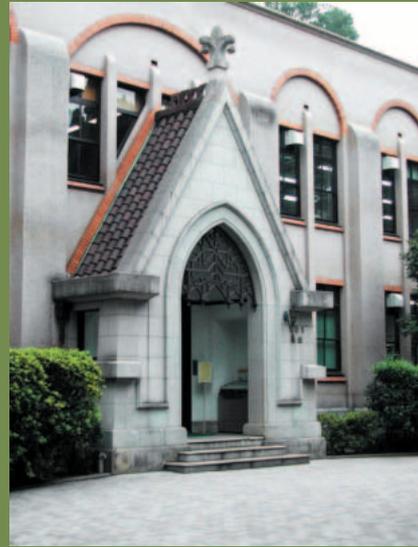
場の教養学部のキャンパスは、旧制第一高等学校のキャンパスとして、震災復興期に作られている。二高から東京帝大へ進む学生は多かったが、京都市大に進む者（たとえば三木清）もいて、一高と東京帝大は制度的には関係はなかった。にもかかわらず、なんとなく連続していたように思われる理由の一つは、建築にあるのではないかと疑っている。

正門から入ると正面にそびえる時計塔。垂直性を強調する表現。こげ茶色のスクラッチタイル。スケールこそちがえ、本郷と駒場はよく似た印象を与えずにはおかない。なぜ似てしまったかという点、同一人物が設計したからだ。建築家の内田祥三（よしかず）で、当時、東京帝大建築学科の教授の席にあり、営繕課長も兼ねていた。時に応じていろんなスタイルを採用する歴史主義の建築家だった内田が、本郷と駒場で同じゴシック様式を選んだのは、カレッジ・ゴシックという言い方があったように、中世に由来するゴシックこそ高等教育にふさわしいと考えられていたからだ。理由は、

学問と高等教育が中世の修道院から生まれた歴史にちなむ。

全国各地の高等教育機関でゴシックは広く使われていたが、一高と東京帝大の二つにしかない内田好みの作りがあるので紹介しておこう。震災復興期の両校時計塔以外の建物のいくつかについている出入口がそれで、ゴシックならではの急傾斜の三角屋根が取りつく。何か連想しませんか。当時、内田の下で図面を引いていた弟子たちは、これを“犬小屋”と呼んだ。現在の教養学部のキャンパスを調べてみたら犬小屋は二つあった。

内田による二高のキャンパス整備以前、つまり震災前、駒場は農場であったが、その名残りはないかと歩き回って、学生食堂の前や運動場の周辺に、太いクスノキを何本か見つけた。ケヤキやイチヨウとはくらべものにならない太さと風格を誇っており、農場時代から生えていたのではない。震災と二高と戦後の教養学部をずっと見つけて今にいたる、樹令は伐ってみたいとわからないのだが。



✪ 内田好みの“犬小屋”は二つだけ残っていた ✪



↑ 本館の裏の壁につく不思議な校章。「国」とは何を意味するのか



↑ 時計塔の左右に突き出す八角形の造形は、西洋の中世の城に由来するゴシック様式の塔の定石的造形



↑ 正門に残る旧制一高の校章



↑ 震災前からにちがいないクスノキの古木